

5-7

主題

個別の排泄介助を推進することで見てきた連携の大切さ

自然な排泄

副題

トイレで排泄することが極自然なことになるために

個別ケアの充実

研究期間

23ヶ月

事業所

社会福祉法人中野区福祉サービス事業団 しらさぎホーム

発表者：倉林 良平(くらばやし りょうへい)

アドバイザー：なし

共同研究者：西山和弘・中野真樹・武田里美・川島雅明

電 話

03-3336-6511

メール

nakano-j@nfsj.jp

FAX

03-3336-5200

URL

http://www.nfsj.jp/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

社会福祉法人 中野区福祉サービス事業団 しらさぎホーム

平成6年に開設した特別養護老人ホーム(85床)、併設短期入所生活介護(9床)の施設です。平成15年より自主運営となり安定した経営とサービスの質の向上に取り組んでいる。平成21年に作成した「第2次特養等経営改革計画」(以下3カ年計画という)の中で、おむつに頼らない排泄介助を掲げている。

《研究前の状況と課題》

自立している利用者以外、ほとんどがオムツを装着し、基本的に定時での交換やトイレ誘導を行うという、職員主導型の排泄介助であった。排便についても-3日目に下剤を服用してもらうことが基本となっていた。さらに、排泄に関しては介護職のみで対応していることが多く、多職種で連携して取り組むこともなかった。個別の排泄支援については3カ年計画の課題でもあり、介護サービス改善委員会では、排泄は個人の尊厳に関する最も重要な部分であると捉え、個々の状況にあった排泄支援が生活の質を高め、日常の身体及び精神機能の向上につながるのではないかと。「行きたい時にトイレで排泄ができる」「できるだけ自然な排便を促す」にはどうしたらよいか検討した。その結果①尿意があるのに定時で誘導していることは、利用者本位のサービスではない。②運動量が少ないことに加え、自然な排便を促す方法に取り組んでいない。という課題があがった。

《研究の目標と期待する成果》

自立者と経管栄養者を除く74名の利用者を対象とし、今年度は100%の利用者の随時トイレ誘導が出来ることを目標とした。介護サービス改善委員会では、取り組み方法として①数名の利用者をピックアップして1週間状況を観察し、排泄のサインやパターンを把握することから始める。②さらに、尿量や排泄間隔を把握したら、少しでも快適に過ごせるよう、日中はおむつからパットに変更していく。③排便については、運動量を確保できる歩行可の利用者を選び、腸蠕動を促す方法を検討する。まずはこの方法で順番に取り組み、徐々に人数を増やしていくことにした。

仮説①職員が、利用者の排泄状況に合わせ、随時トイレに誘導し座って排泄させることで、おむつが不要になる利用者も出てくるのではないかと。

仮説②できるだけ自然な排便を促す取り組みをすることで、下剤を服用する回数が減るのではないかと。

《具体的な取り組みの内容》

①これまでは、排泄介助のパターン表があっても職員により各自の判断でおむつの使用方法が違っていたことがあった。フロアの排泄担当者が中心となり、まずは6名の対象者をピックアップし、改めて利用者の排泄状況を確認するため、他の職員から情報収集を行った。②収集した情報を基に誘導方法やパターンを表にし、1週間はその計画に沿ってトイレ誘導を実施した。③1週間毎に実施してみてどうだったか、再度フロアで検討し、適宜誘導方法を見直し、個々に合ったパターンをつかんだ。④自然な排便を促す取り組みについては、管理栄養士、看護師と連携し十分な水分摂取と、腸内環境を整えるためにオリゴ糖を摂取させてみることにした。対象として歩行が出来て効果が出そうな利用者を3名選別した。⑤方法として1日1リットル以上の水分摂取と毎朝オリゴ糖をティースプーン1杯摂取する。⑥さらに、職員が付き添い歩行能力に合わせフロア内を歩行する。⑦前傾姿勢をとると自然に腹圧がかかる排泄補助用具を購入し活用した。また、上体を安定させることができるため便座からの転落防止にもなった。⑧さらにリハビリ連絡会では、機能訓練指導員と連携することで、その利用者が日常的に身体機能の維持、向上を図れるサービス内容をケアプランに盛り込み、運動量を確保した。連絡会は毎月1回開催され、情報交換と支援方法の変更を検討する場となり、入所者の状況変化に適切に対応できるようになった。

《取り組みの結果と評価》

仮説①については、排泄誘導方法を適宜見直ししきめ細かく対応したことで、おむつが外れた入所者はいなかったが、日中は全員、より小さなパットに変更することができた。そのことが職員の排泄支援に対する意識向上につながり、行きたい時にトイレに行ける状況を100%達成できた。仮説②については、3名の入所者にオリゴ糖を使用してみたが、下剤を服用せず、オリゴ糖だけで良好に排便が見られた入所者は1名であった。他の2名については、脳梗塞等による半身麻痺があり、効果は期待できなかった。しかし、職員に排便を促すために水分摂取と運動が必要なことやトイレで排泄するために座位保持ができるようにすることなどを周知する機会となった。

《まとめ》

今回の取り組みで、個別対応、多職種協働で多方面からアプローチを行うことが問題解決につながっていくことを実感した。トイレで排泄することは、当たり前のことであるが、座位保持が条件となる。今後も身体機能を維持し、可能な限りトイレでの排泄を支援していきたい。今後は経管栄養者についても座位保持を検討し、1日1回でもトイレでの排泄を試みるのが課題である。

《提案と発信》

特養という集団生活の中のケアは、集合体でのケアになりがちである。個別ケアのひとつとして排泄ケアに取り組んだ結果、様々なアプローチ方法により改善やケアの充実を図れることが分かった。現実的には、個々に対応したケアを持続させることは大変なことではあるが、持続させるためのアプローチを常に考えられる仕組み作りが大切であると感じる。

【メモ欄】